

私たちが過ごしております顕現節は、主なる神の栄光が現されたのを私たちが学ぶ期節であります。それはすなわち主イエスによって伝えられた天国について、また私たちに与えられております伝道の使命について学ぶときとなっております。本年は来る2月16日まで顕現節を過ごします。その意味では顕現節は聖霊降臨後の期節と同じ意味をもつときなわけです。

さて本日の福音書は、ナタナエルという人が主イエスの弟子となったという場面であります。ナタナエルといいますが私たちに聞き慣れない名前です。聖書の中でよく出てまいります十二弟子とは違う人ではないかと思われる方もあるかも知れません。十二弟子とは、福音書の記者によって若干異なっておりますが、ペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネ、ピリポ、トマス、マタイ、もう一人のヤコブ、タダイ、シモン、ユダ、バルトロマイの十二人です。ここにはナタナエルという名前はありません。しかしヨハネによる福音書の中では、ナタナエルは十二弟子の一人に数えられております。まず、このナタナエルというのは誰のことなのでしょう。

おそらく最後に出てきましたバルトロマイがナタナエルではないかと考えられております。ヨハネによる福音書ではバルトロマイの名前が見当たらないからです。また、福音書の中の十二弟子が紹介される場面では、バルトロマイはいつもフィリポと一緒に紹介されており、互いに親しかったと思われませんが、本日の福音書の箇所でも、ナタナエルはフィリポと大変親しかった様子が伺えます。このようなことからナタナエルは主イエスの十二弟子の一人であったバルトロマイと同一人物であったと思われまます。

さて、本日の福音書の箇所は、ナタナエルと主イエスとの最初の出会いの場面であり、弟子として召された場面でありました。この箇所から私たちは、伝道とは何なのか、主イエスをこの世に広めるとはどういうことなのかを示されるように思います。

主イエスはそれに先だって、フィリポを弟子として召されました。日本などでは弟子が先生の門をたたき、弟子にとりていただきますが、ユダヤでは反対で、先生が弟子を召すのが常となっております。フィリポは主イエスとの出会いを果たし、わたしに従いなさいとの御言葉に聴いていったのでした。まずここから伝道とは、主イエスとの出会いを果たすことであるのが示されております。説得でも義務でもなく、心の中に主イエスを迎えようとする、受け入れようとする、そして心の中を照らした光を自分の中に確かな存在にしていくことであるのを示しております。

ナタナエルは学者だったようです。フィリポが主イエスに出会い、旧約から預言者たちによって伝えられ、人々がその登場を心待ちにしていた救い主が確かに現われたとナタナエルに語ったのでした。ところがナタナエルは信じようとしませんでした。主イエスがこの世の成長を過ぎられたナザレは、旧約聖書にも登場しない、無名の町でありました。エ

ルサレム等旧約聖書に何回も登場し、由緒ある町とされていた存在からは、ナザレは差別されていた町であったのです。ナタナエルはそれをよく知っていたのでしょう。ナザレから何か良いものが出るだろうか」と言ったのはこのような理由からでありました。このでもフィリポの対応が極めて重要です。フィリポは救い主に確かに出会ったという確信がありました。普通ならばフィリポはその出会いがまちがいないことを示すため、また自分を正当化するために、ナタナエルに対して説得を始めたことでしょう。しかしフィリポはそうはしませんでした。「来て、見なさい」とだけ言ったのでした。私が出会った主イエスにあなたも出会って見なさい。そうすればわかるだろうとだけ言ったのでした。フィリポは主イエスを指し示しはしましたが、説明や説得はしませんでした。

ナタナエルはフィリポの勧めにしたがって出かけました。これもまた救いのために重要なことなのです。ナタナエルは学者でありました。しかし友の勧めに素直に応じる心を持っていたのです。

ナタナエルが主イエスのところへ向かったとき、主イエスはそれをご覧になって言われました。「見なさい。まことのイスラエル人だ。この人には偽りが無い」、ナタナエルは主イエスが、このような短期間にそのような判断を下すことができるのに驚きました。そしてこの言葉こそ、敬虔なユダヤ人なら誰でも知っている、誉め言葉でありました。その後記されている主イエスとナタナエルの言葉に注目してみましょう。

ナタナエルが、「どうしてわたしを知っておられるのですか」と言うと、イエスは答えて、「わたしは、あなたがフィリポから話しかけられる前に、いちじくの木の下にいるのを見た」と言われた。

ナタナエルはこれを聞いて驚きました。それは彼がイチジクの木の下にいるのを、主イエスが見られたからではなく、主イエスが彼の心奥底にある思いを読み取られたという事実でありました。ナタナエルはいちじく木の下で、ユダヤ人の習慣に従って黙想していたのです。そして来たるべき救い主をについて瞑想していたのです。そして今、ナタナエルは主イエスが彼の心奥底まで見られたことを知ったのでした。ナタナエルのプライドも、知識も、主イエスとの出会いに勝るものではなかったのです。こうしてナタナエルもまた、フィリポと共に主イエスの弟子とされたのでした。

私たちが伝道と言いますとき、聖書を片手に自宅訪問をしたり、駅頭などで路傍説教をしたりということをよく考えます。それももちろん伝道ではありますが、それだけが伝道ではないということを本日の福音書が語っております。伝道とは、フィリポがなしたように、主イエスを指し示すこと、説得や説明ではないということです。そして自分自身が主イエスの出会いを果たすこと、日々主イエスとの出会いによって新たにされていることでありましょう。私たちが伝道の務めを果たすのは、無理や犠牲では決してなく、自分自身へ語りかける主なる神への自然な応答でありましょう。